

我高津の前に強敵兵庫果立工業高校が現われ、シソーゲームを繰りひろげ、勝利は掌中に落ちたかと思われたが、勝利の女神は我高津に微笑まず、惜敗した。しかし、小生に一番あざやかに残っている試合は、いつたん引退？した三年生まで繰りだして戦ったその年の全日本高校選手権大阪予選の決勝、相手はしぶとい三國ヶ丘高、まさに宿敵というべし。梅雨も明け、初夏の陽ざしがにわかには消え、曇って、車軸を流す様な雨、あわや試合は流れるかと思われたが、一時間以上も降った雨はピタッと止み、レフリーの木イッスルは鳴った。しかし、ぬがるんだ地はスパイクを用なしにした。三國ヶ丘は意地の汚ないフリースローを繰りかえし、ペースを乱した。時間は残り少なくなるが一点の差で追う。フォワードのニュートもバーにはかり当る。時間ばかり気になつた。しかし、遂にタイムアップを宣するホイッスルがなつた。全身の緊張は解け心身ともにがっくりしたものであつた。こうして振りかえつてみると部史の何分の一かに参予しただけであるが、意気深きものがあつた様だ。スポーツを楽しまつてもりで入部したのが何時の間にか鍛錬されていった。最後に、高津のハンドでなく、ハンドの高津を維持されん事を期す。

三年生

和の精神力

松倉 建樹

部誌創刊おめでとうございます。創刊号に寄稿できると言うのは僕にとって最大の喜びであり、且つ高校三年間のうち数少ない想い出の一つとして心に残る事と思つています。この機関誌を通じて、高津ハンドボールの技術向上を、いやむと大切な事である先輩諸兄姉と現役部員との間をもっと緊密に、即ち、人間的、社会的にも「和」を達成する事が、この部誌の役割だと信じます。そこで創刊号に寄稿するにあたり、僕は、「和」について、又、それに付随して、「精神力」ということについて少し書いてみた。「和」即ち「チームワーク」である。これ程、言行一致の難しい言葉はそう多くあるまい。チームワークというものがいかに大切であるかというのは衆知のことである。僕は主将をしていた関係上、より一層心にこびりついている。この原因には、二つあると思う。まず、第一に一年が二年に、二年が三年に頼りすぎていることである。何事につけてもそうである。例えば、少しきつい練習の翌日等、「今日は体の調子が悪い？から」といつ

てすぐ練習をさぼる。また主将に報告する者はいい方である。ひどいのは、無断で休むというのが大部分である。このように自己の行動に対して責任感が無いことがとうである。高津ハンドボールの特徴の一つとして、主将は毎年二年生が担当している。これは二年生が三年生に対して頼る。ということもなく責任感をもたせるといふことが一つのねらいであると思う。だから一年生の諸君も、自分の占めている位置を自覚し、即ち、義務を果たすよう努めてほしい。第二に、三年生にあると思う。クラブ内での行動が下級生に対してどのような影響をおよぼすかということも考えたことがあるだろうか。ここで二度反省すべきだと思う。いくら技術がすぐれていてもチームワークがなければ、絶対といっていいほど、大事故などおこす恐れがある。だから僕も高校生活は後3ヶ月しかないが、少しでもクラブのチームワークに対して援助するつもりである。現役諸君も早く自覚してくれ、ことを望みます。次に「精神力」について少し書いておこうと思う。最近の傾向として非常に精神力が弱くなっていると感じられる。恒例の春夏合宿練習をみてもわかると思う。あえてこの紙面に書かなくてむかむかと思うから割愛する。今まで

に一番それが心にしみたのは、近畿大会の時である。35年度は奈良県育英高校、36年度は同じく奈良県添上高校に一回戦で敗れた。技術面では絶対に劣っていないのに敗れ去った。何故か、精神力が弱い事である。即ち、根生負けをしたのだ。僕は残念で、たまらない。今書いている時にもその時の様子が頭に浮んでくる。このように悪い悪循環、くりかえしは早く打ち切つて、来年度にはぜひ勝ち進んでもらいたい。クラブと共に部誌の発展を期して筆を置きたいと思う。

苦い思い出

前田 宏之

部史の一頁にのせられるかと思つた。どんなことを書いていいのかわからない。ライトフルバックが私にとって一番の思い出がある。それは一年生の六月に行われた全日予選がはじめの試合であった。松倉と二人で、二三年の方に混じつてかたくなつたかもしれないが、一生懸命やった。この三年間へ正味二年半、いろいろ苦い思い出があった。合宿というもので、一年の合宿であったか、途中で首腸になつた者もいて、大変苦しかった練習であった。